

CAF 施行例は検出感度以下になる時間が前 2 者に比し 1.5 倍であった。しかし投与後 4 時間の時点においての血中濃度に差は認めなかった。また透析は ADM 血中濃度にほとんど影響を与えないことが判明した。5-FU 正常腎機能患者の半量投与であるが、透析日、非透析日施行例に関わらず DIV 終了後 1 時間で血中より消失。それは正常腎機能患者も同様であった。【副作用】軽度の脱毛のみ。【抗腫瘍効果】3 クール終了後、肝転移 61% 鎖骨上リンパ節転移 50% 縮小。結語 本症例に対して今回の CAF レジメンは比較的安全に施行可能かつ有効性があることが確認された。

4) 進行再発乳癌に対するタキソテールの使用経験

川原聖佳子・松木 淳
横山 直行・岡田 貴幸
青野 高志・武藤 一朗 (新潟県立中央病院)
長谷川正樹・小山 高宣 (外科)

1997 年 12 月から 2000 年 7 月までに当科で経験した前治療を有する進行再発乳癌症例 15 例 (37~70 歳, 平均 52.9 歳) に対して, タキソテール (ドセタキセル) 60mg/m² を単独で 3~4 週間毎に 1 回点滴静注し, その効果を検討した。副作用のため治療を中止し判定不能であった 1 人を除く 14 例のうち, CR は得られなかったが, PR 6 例, NC 3 例, PD 5 例であり奏効率は 42.9% であった。再発部位別では, 軟部組織 (乳房 100%, 皮膚 100%, 局所・領域リンパ節 50%, 遠隔リンパ節 100%, 縦隔肺門腫瘍 40%), 肺 (42.9%) での奏効率がよく, 以下骨 (25%), 肝臓 (25%) で脳転移には効果は認められなかった。副作用としては Grade 3 以上の白血球減少, 好中球減少を 93.3%, 発熱を 60.0%, 口内炎を 46.7% に認めたがいずれも対症療法により改善した。脱毛は全員に認められ, そのうち全脱毛は 26.7% であった。タキソテールは進行再発乳癌治療において, 特に second line の治療として重要な薬剤の 1 つであると考えられるが, 重篤な副作用も認められ, 少量投与や他剤との併用などさらに検討する必要があると思われる。今後も症例を増やして検討する予定である。

5) 進行・再発乳癌に対するタキソテールの使用経験

小川 洋・藍澤喜久雄
大谷 哲也・片柳 憲雄
山本 睦生・齋藤 英樹 (新潟市民病院)
藍澤 修 (外科)

【目的】タキソテール (DTX) は, 進行・再発乳癌に対する化学療法において最も有効な薬剤として期待されているが, 当院においても 1998 年 4 月より DTX による治療を施行している。DTX の抗腫瘍効果, 副作用について retrospective に検討したので報告する。

【対象】1998 年 4 月より 2000 年 8 月まで DTX による化学療法を受けた 15 例 (進行 5 例・再発 8 例・術後補助療法 2 例) 【方法】DTX の投与方法は 60mg/m² 90 分点滴を 3 週おき, 原則として入院の上投与。副作用などにより 2 回目以降投与量を増減させた症例は認めず。

【結果】15 例の平均年齢は 53.3 歳 (44-71) で全例女性。投与回数中央値は 6 回 (3-15)。CAF などの前治療歴のある症例は 13 例で, それらに耐性を示したのは 10 例 (76%) であった。全例ホルモン療法を併用。転移部位は肝・骨が最も多く 8 例で, 3 臓器以上の転移巣を有した症例は 9 例であった。副作用は, 嘔気・嘔吐が 11 例 (73%), 食思不振が 4 例 (27%), 脱毛が 15 例 (100%), 好中球減少は G1-2 が 7 例 (47%) で G3-4 が 1 例 (7%)。6 例に G-CSF を投与し改善を認めた。抗腫瘍効果判定は 13 例に可能で, CR 2 例 (15%), PR 1 例 (7%), NC 5 例 (38%), PD 5 例 (38%)。奏効率は 23% であった。【考察】CR, PR の 3 例はいずれも CAF 8 クール以上の前治療歴がある症例で, 2 例が進行乳癌, 1 例が再発例であった。転移部位による抗腫瘍効果の差は認めなかった。【結語】DTX は前治療歴のある再発乳癌のみならず, 高度進行乳癌の治療としても有効性が期待でき, 安全に化学療法を施行できると思われる。

6) 進行再発乳癌に対する Weekly Paclitaxel の使用経験

岡部 聡寛・佐野 宗明
田中 乙雄・梨本 篤
土屋 嘉昭・藪崎 裕
瀧井 康公・諸田 哲也
出口 義雄・須田 和敬 (新潟がんセンター)
佐々木壽英 (新潟病院外科)

近年, 乳癌の化学療法として Paclitaxel (PTX) が注目されており, とくに Anthracycline (ADM) や

Docetaxel (DTX) 治療後および耐性の再発乳癌に対する2nd, 3rd line chemotherapy としての有用性が期待されている。我々は進行再発乳癌に対し PTX の weekly 投与を1999年4月より開始し、その治療成績を報告する。対象は進行再発乳癌患者36例で、年齢中央値53.1(29~74)歳、転移臓器は1~4臓器で、肺16、肝7、軟部7、骨14である。無再発期間は342~3135日(中央値1111.2日)であった。PTX 初回治療例2例、前治療としてADMのみ(A群)19例(PD15例)、ADM+TXT(B群)15例(PD8例)であった。方法はPTX80mg/m²/week を3週投与し1週休薬を繰り返した。平均投与回数12.8回(2~6Kur)、観察期間は72~440(中央値209日)である。治療効果はA, B群でそれぞれ奏効率26%, 27%であり、Clinical benefit を反映する long-NC を含めればそれぞれ53%, 40%であった。Time to progression の中央値はともに5ヶ月程度であった。有害事象の検討では約半数に grade 3以上の血液毒性を認め、脱毛、抹消神経障害などが高頻度に見られた。PTX の Weekly 投与方法の効果は必ずしも高くないが、2nd, 3rd line chemotherapy としては満足すべき結果であり、投与方法、併用療法などさらなる検討が必要と思われる。

7) 進行乳癌に対する造血幹細胞移植併用大量化学療法の現況

張 高明・廣瀬 貴之(新潟県立がんセン)
今井 洋介(ター新潟病院内科)
佐野 宗明(同 外科)

【はじめに】進行乳癌に対する造血幹細胞移植併用大量化学療法は1980年代から実施され、予後改善の有効な方法として期待されてきたが、近年の比較試験の結果、通常化学療法に比較して必ずしも勝っているとは証明されていない。当院での乳癌に対する自己造血幹細胞移植併用大量化学療法および同種造血幹細胞移植療法の現況について報告する。

1. 自己造血幹細胞移植併用大量化学療法

【目的】進行乳癌に対する術後補助化学療法としての幹細胞移植併用大量化学療法の安全性および CAF 療

法と自己造血幹細胞移植併用大量化学療法の比較検討。

【方法】15歳以上70歳未満の腋窩リンパ節転移10個以上の進行例で、主要臓器機能に異常が無く、INFORMED CONSENT が得られた症例。CAF 療法(CPM: 500mg/m², 5-FU: 500mg/m², ADM: 40mg/m²)を3週おきに合計6コース実施。大量療法は CPM: 6000mg/m², Thio-TEPA: 600mg/m² を3日間で施行後自己末梢血幹細胞(あるいは自家骨髄併用)移植を実施。

【結果と考察】33例(35~68歳)が登録され、6コースのCAF 療法終了後23例で大量療法が実施された。現在までにCAF 療法単独群(A): 11例中6例、大量療法群(B): 21例中6例が再発している。平均観察期間24ヶ月の時点では、全生存率はA: 72.0%, B: 74.3%, 50%無病生存期間はA: 32ヶ月, B: 45ヶ月(p=0.025)である。進行乳癌における自己造血幹細胞移植併用大量化学療法の有用性の評価のためにはさらに長期の観察期間が必要と考えられる。

2. 同種造血幹細胞移植療法

【背景】同種造血幹細胞移植は移植後のドナーリンパ球による Graft versus tumor (GVT) 効果により自己移植では得られない高い抗腫瘍免疫効果が得られる。固形腫瘍においても GVT 効果を期待して同種造血幹細胞移植が積極的に実施されている。当院でも再発・難治性乳癌を対象として同種造血幹細胞移植の臨床第I/II相試験を実施中である。

【方法】移植前処置は有害事象の多発する従来の方法ではなく、近年開発された骨髄非破壊的の化学療法を実施し、造血細胞は同種末梢血幹細胞を使用する。

【結果】現在までに1例の移植を終了しており、安全に実施可能であった。本症例につき、詳細を報告する。

Ⅲ. 特別講演

「進行・再発乳癌に対する治療」

埼玉県立がんセンター内科第一部長

田部井 敏 夫 先生